『月刊広告批評』 157号 pp. 62-74 マドラ出版 1993年1月1日発行

1992-35

日本は生活大国になれるか

橋爪大三郎

1、生活とはなんぞや

日本が生活大国になるのかどうか。この問題を考えるために、順序としてまず、生活とはなんなのかという問題を片づけておきましょう。

人間は誰でも生きている。寝たり起きたり、働いたりものを食ったりしている。これが生活にほかなりませんから、何もあらためて「生活とはなんぞや？」と考えこまなくてもよいはずです。

けれども人間には、頭がありますから、たまにはものを考える。オレはこういうふうに生きているけれども、これでいいのかなあと、反省する。反省までいかなくても、自分の生活を見つめなおしたりする。そういう殊勝な動物が人間です。

しかも、それでおしまいということはありません。たいていの場合、自分の生活をちょっと変えてみようとする。もしかしたら、もう少しうまいやり方があるんじゃないか。そう思って、自分の日常をチェックする。そうやって、あるべき自分の生き方みたいなものを思い描きながら、自分の生活を見つめなおすっていうことを、人間は大昔からずーっとやってきたんじゃないか。

そんなふうに、よりよい自分の生き方、あるべき自分の人生みたいなものを考えながら、自分の日常を見つめなおしていく――こういう往復運動のなかで、「生活」という言葉が意味をもっているのだと思うわけです。

すると、「生活」とは、ただ生きている、生存しているというレヴェルではなくて、生きる意味とか幸福の実感とか、家族や友人とのよりよい関係とかいったプラス・アルファの要素を必ず含むことになる。それが生活という言葉の意味です。

では、この生活（特にその、プラス・アルファの部分）は、どういう内部構造を持っているのか？ この点を考えてみると、歴史を通して、だいたい三つぐらいの要素ででき上がっていると言えます。

まずひとつは「家族」。人間を再生産していくのに、どうしても必要なのが家族です。

それから二番目に「労働」。人間の生命を維持していくため、食糧とか住宅とか衣服とか、それ以外のいろいろこまごまとしたものとかを作り出すのに、そうした営みが必要だった。これが人類の歴史というものです。

家族と労働、この二つはどちらも必要な要素なんですが、それ以外に、必ずしも必要とは言えない第三番目の部分がある。これを仮に、「社会」とよぶことにします。みんなが生きていくうえで、よりよい生活の仕方をするためのものである。社会といっても中身はいろいろで、軍事とか、宗教とか、国家とか、それから芸術も入れてもよいでしょう。要するに、家族でも労働でもないそのほかのものはみんな、社会とよんでしまうことにします。

さて、この三つの関係は、なかなか複雑になっていまして、渾然一体となっている場合もあれば、けっこうばらばらに分離している場合もある。いわゆる未開社会では、渾然一体となっていますから、生活とは何かを反省しようと思っても、それはむずかしい。それに対して、われわれの社会は、生活の諸要素が、機能分化してばらばらになっている。

「家族」「労働」「社会」の領域が別々に、目に見えるかたちになっているわけです。そこで、昔はひとかたまりの生活だったものが、いまは「家族」を中心にした自分の生活、私生活というものがあり、残りは自分の生活じゃない。こういうイメージになりがちであります。

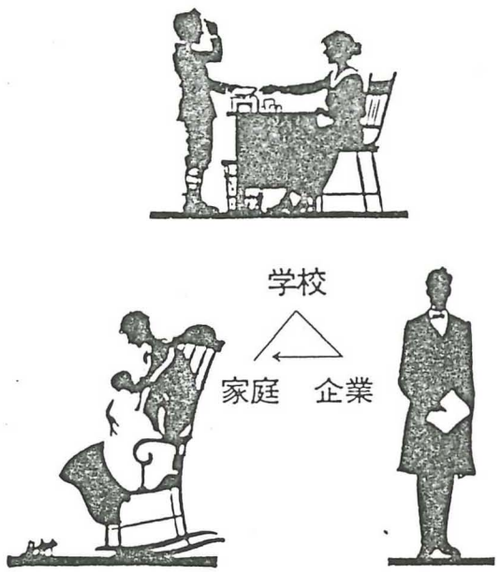
もう少し、そこを詳しく言うと、労働（言い方を変えれば生産）の部門は、企業というかたちで組織化されてしまった。そして、原則的には企業に参加することによって、生産活動を営むしかない。家族は、生産と無縁の場になった。機能分化の遅れた部分――農業とか、ジジババ・ストアとか、いろいろなところではまだ家族・即・生産ですけれど、ふつうにイメージすれば、お父さん、お母さんが外へ出て働く、すな

わち企業で労働するということになってくるわけです。

三番目の「社会」も国家というかたちで、やっぱり完全に組織化されてしまった。ふつうの人は、ただ税金を払っているだけです。それに対して、みんなのことを考える専門家がいて、水害が起こらないようにとか、敵が攻めてこないようにとか、貧乏人が困らないようにとか、そういうことを一生懸命考えている。それが仕事なんです。そのおかげで、普通の生活のなかから、そういうみんなのことを考えるという要素はどんどんなくなってしまった。税金をどうやって払おうか、ということさえ考えていればいい、みたいになっちゃった。

国家のほかには、例えば学校の存在が、とても大きい。学校は、世代間の文化の継承ということをしているんだけれども、その大部分がマニュアル化されてしまっていて、教科書があり、試験があって、全部他人まかせ。親から子供へ、伝わるべきものなんてあまりない。こういうふうに機能分化した結果、家族は孤立したばらばらな、私生活をする単位になってしまって、その外側に企業とか国家とか学校とかがある、という配置になりました。(下図)

そこで生活は、こんなイメージになります。人間は、おぎゃあと生まれてから、とりあえずは家族のなかにいますが、そのあとまず学校に行き、たいていの人はそのあと企業に移り、それでよぼよぼになってから、また家族に戻ってくる。毎日の生活も、この三角形のなかを行ったり来たり、一生を通じても、この三角形のなかを行ったり来たり。それが生活、ということになってしまった。



生活をイメージするとは、本来、社会全体をイメージすることと重なりあうはずなんです。でも、社会全体をイメージするのはあんまり複雑なので、いきおい生活と言うと、私生活、家庭生活を中心に反省する、ということにならざるをえない。ところが、そんなふうに反省しても不毛で、いくら考えてみても、改善の余地があんまりなかったりする。そこで、生活のことを考えるのをよそうっていう、逃避の傾向もあるみたいに思う。

企業や学校は、家庭と違う。その特徴は、管理社会——人間と人間の関係が合理化され、機能的なものになっていて、

一面化されてしまっている、という点にあります。だから楽しくないわけです。でも、合理的で機能的であるからこそ、家庭生活に豊かな配当をもたらしている。

社会(企業とか国家とか学校とか)から、家庭への配当は何かと言うと、二種類あります。まず第一に「所得」である。その所得を使って、こんどは商品(や行政サーヴィス、教育サーヴィス)を買い取る。所得がまずどんと家庭に与えられ、そのあとさまざまな商品が与えられる、こういう配当があるから、家庭はワンパターン化しているけれど、まあいいやとみんな思うんですね。いくら考えてみても、ほかにやり方もない。生活をイメージすると、社会全体とは関係ない、家庭における消費生活をイメージしてしまう——これが、現在のわれわれの生活の構造なわけです。

2、時間の組織

さて、生活を、家族/労働/社会という領域にわけて考えてみたわけですが、今度は別な角度——時間/空間から考えてみます。

生活には、時間/空間の両面があります。

時間というのは、文字どおり時間のこと。空間というのは、人間関係のことだと考えてください。

企業とか国家とか学校とかは、人びとの私生活(家庭)がないと成り立たない。で、人びとはそこから、時間をかけてえっちらおっちらとやって来る。企業は、いまの社会では王様みたいに威張っていますから、そこにかなりの時間を取られる。特に、一番使いでのあるおいしい時間をほとんど取られてしまうわけです。だから、家庭に残されている時間は、その残りかすみたいなところばかりというわけで、それが、私生活が充実しないひとつの原因になっている。

こういう時間構造ができあがった由来を、少しさかのぼってみます。

もともと、時間がこういうふうに、二つの局面にわかれるという現象はなかった。狩猟や採集のような、単純な物質生活を営んでいた社会では、自然のリズムと同調するように時間が流れていた。自然には自然の循環があります。昼があれば、夜がある。夏があれば、冬がある。雨季があれば乾季がある。いろいろな自然のリズムがあって、人間もそれに合わせて動く。なにごとをするにも、それにふさわしい「時」がある。そのときどきに、それに合わせて行動していればいいのであって、社会に独特なリズムをわざわざ別に作り出す必要がなかった。

ところが、農業が始まってから、これが次第に分離してくるわけです。

農業はもともと自然を利用したものだから、自然のリズムとまったく矛盾することはできない。けれども、農業は、自然を破壊するという一面ももっている。木を切り倒して、雑草の一種である穀物の種をまく。自然生態系の遷移で言うと、その一番最初の段階(山火事の直後)が、太陽がじゃんじゃん当たって作物の成長率がいい。このあと、雑草のあいだか

ら木が生えてくるんだけど、木が生えてくるまえにもう一度元の状態に戻して、また始めからやる。ずっと最初の状態に保っておく。要するに、人間が自然に介入しているわけですが、刈り入れとか種蒔きとかをする。これは、人間が計画的にすることだから、かけ声をかけてセーノというふうに作業する。こうして、農事暦とか、共同作業の規律とか、そういうルールがいっぱい出来てくる。労働は、勝手にやるわけにはいかず、社会的なルールに従って行うものであるということがはっきりしてくる。

この、農業社会がどれだけ進歩しているかによって、時間の観念に違いが出てくる。

たとえば、階級分化があまり起こっていなくて、みんな仲間で共同作業で農業をやっているような段階だったら、労働する人びとも、自分たちは共同体だという自覚をもつことができた。そうすると、そこにうまれる時間のリズムは、一種のお祭りみたいなものになります。働くときは忙しいですから、なんにも余裕がない。それこそ一生懸命働く。でも、それが一段落するわけでしょう。すると、休息する。あるいは、それまでできなかったことをいろいろやって楽しんで、お祭りになる。お祭りのときには余裕がありますから、さっき言った、生活を見つめなおすみたいなことだっていろいろやる。おもしろいものを見てもいいし、おいしいものを食べてもいいし、ボーイフレンドやガールフレンドで集まってわいわい騒いでもいいわけです。

ところが、もうちょっと苛酷な農耕社会もある。極端に言うと、奴隷制になってしまった社会です。奴隷制になると、お祭りの要素なんか、ほとんどなくなってしまう。奴隷の持ち主にしてみれば、奴隷を働かせれば働かせるほど利益になるわけだから、お祭りなんかなくていい。穀物なんかは、遠方の市場で売りさばいて貨幣収入になるわけだから、もともとの共同体の必要をこえて生産しなければならない。農業が、利潤を目的とした産業になってしまう。

こうなると、生活を振りかえるゆとりもなくて、ひどいことになってしまうのですが、そこで生まれたのが「一週間」という考え方です。これは、社会学のマックス・ウェーバーという偉い学者が言っていることなんだけれども、どうしてユダヤ人たちの神さまであるヤーウェが七日目ごとに休めと命令したかというと、農場の奴隷やロバを骨休めさせるためなんです。ほかの神さまは、そんなこと言ってくれませんでしたから、奴隷たちは来る日も来る日も働かなければならなかった。メソポタミアの近辺は乾燥地帯で、雨なんかめったに降りませんから、ほっとけばいくらでも働かされちゃう。それをヤーウェが、七日目ごとに休むように命令してくれたおかげで、休めるようになった。この規定は、簡単に言うと、貧民救済法の一種なんです。奴隷を働かせすぎないで、資本の損耗を避けるという意味からも合理的だ。あの辺りは十二進法が主流で、それをどうして七日目ごとに休むことに決めたのか不思議だけれど、まあとにかくこうして、一週間という考え方ができた。

一週間を単位に生活のリズムを刻むやり方は、ユダヤ教徒からキリスト教徒やイスラム教徒にも受け継がれて世界中に広まり、宗教に関係ないわれわれ日本人も採用している。だから、当たり前みたいに思ってますけど、もともとはそういうことなんです。

ここで重要なのは、労働が苦役だという考え方が基本になっている点。平日の六日間をふうふういって働く。そうすると、やっと週末になって、疲れた身体を休めることができる。本来の自分に帰れるわけです。労働はいやいやっているわけだから、働いている自分は本当の自分ではない。週末になったら、教会に行って神と向かいあう。人生の意味を考える。家族や友人と楽しく過ごす。そして、つぎの一週間も働けるような、生き返ったような感じを味わう。

こういうリズムは、お祭りのリズムと少し違うでしょう。季節やなにかとも関係なく、きっちり七日ごとに回転する。とても労働合理的な考え方だ。月の回転に合わせた「ひと月」というのは、たいていの暦にありますが、一週間というのは、ぎりぎりまで労働を搾取されてしまうという厳しい状態を経験した世界の人びとだけが編み出した工夫なわけです。

さて、産業革命と近代化をひき起こしたのはキリスト教徒ですから、工場はやっぱりどこかで、こういう古代の苦役労働とつながっている。宗教的な色あいを残している。毎日職場に働きにきてもらうけれど、その代わり、週末はおまえらの時間だからね、というやり方だ。

マルクスは、資本家の工場で働く労働者を見て気の毒に思い、「プロレタリア」とよびました。

プロレタリアの話をちょっとすると、これは、古代ローマの奴隷の一種らしいのです。奴隷にもいくつか階級があって、プロレタリアは下から二番目。最低ランクの奴隷は、使い捨てで、結婚もできない。ガレー船の船底とか鉱山の地下道とかに押し込められて、ろくな食糧も与えられない。死んだら終わり。こういう奴隷は、たしかに安上がりだけれど、つぎつぎ新しい奴隷の補給がないと成り立ちません。安い奴隷がいくらでも手に入るのなら、このやり方でいいですが、奴隷の補給が途絶えがちになると、奴隷も値上がりするので、手持ちの奴隷の再生産を考えなければならない。そうすると、奴隷が死ぬのと同じ数だけ生まれてもらわないと困る。そこで、奴隷に結婚することをゆるす。これが、下から二番目の奴隷、プロレタリアだ。

プロレタリアは、「鉄鎖以外に何も失うものがない」ことになっていますが、それは言葉のあやで、ほんと

は家族があるんです。でも家族を営むことが許されているのは、奴隷の幸せのためではなく、安価に奴隷を再生産するためにすぎませんから、もう生活は最低水準。掘っ立て小屋に住み、食べ物もかつかつ、教育なんか受けられるわけもない。そういう妻子のある労働者が、プロレタリアなのです。

マルクスが工場労働者をプロレタリアとよんだのは、資本家が賃金を払うやり方が、それと同じだと思ったから。資本家は、利潤を追求するから、ほんとはもっと賃金を切り下げたい。でも、最低生活水準より切り下げてしまうと、労働者の家族が崩壊し、生活できなくなってしまうから元も子もない。労働者が減れば、労働市場が逼迫して、労賃が高くなりますからね。そこで、最低生活水準だけはどうにか保障しよう、という考え方が出てくる。

マルクスはさらに分析を進めて、「労働日」ということを言い出した。労働者は資本家と契約して、一日十一時間とかを工場で働くわけですが、本当なら十一時間全部の賃金が労働者に支払われるべきである。しかし、資本家が支払うのは、そのうち労働者の最低生活に必要な部分、たとえば五時間分にすぎない。残りの六時間分は、不払い労働で、資本家のポケットに入ってしまうわけです。これはずるい。どうしてそういうことが可能になるのかを、マルクスは「資本論」で詳しく分析した。

この労働日の考え方は、たしかに、非常にリアリティーを持っていたわけです。

資本主義と言えば、機械制大工場を思い浮かべればいいけれど、その典型がおそらくテーラーシステムでしょう。フォードの自動車工場みたいな、ベルトコンベヤーのシステムです。ここでは、その昔の自然のサイクルに代わって、工場の時間のサイクルが主役を占める。たとえば溶鉱炉だったら、一度火を入れたらずーっとあっためておいたほうがいいから、簡単に休めない。二十四時間労働になる。でも、人間は寝なくちゃいけないから、どうしても二交替、三交替になる。昔の紡績工場もそうで、外国から買ってきた機械設備を夜ねかせておいたんじゃあ、とても外国と太刀打ちできないから、稼働率をあげるため、やっぱり昼夜二交替、三交替で働かせる。要するに、機械の都合に人間のほうを合わせるんです。

トヨタのやっているジャスト・イン・タイムってのがありますが、あれも機械の都合に人間を合わせている点は同じだ。労働は資本に比べて、安いんです、やっぱり。だから、人間のほうが資本に合わせて、ジャスト・イン・タイムで機械にはりつかなきゃいけない。よく考えてみれば、労働者を毎日始業時間に工場に通わせるというシステムも、ジャスト・イン・タイムそのものである。労働者はなまものですから、工場に置いといたんじゃ、いたんでしまう。そこで家庭に戻して、ジャスト・イン・タイムで工場にやってこさせる。そのかわりに、労働力市場の相場で賃金を支払う。この構造は、いまも昔もちっとも変わっていない。

変わった点と言えば、労働者の所得が、最低賃金ではなくて、だんだん上昇してきたこと。マルクスの予想では、資本

主義経済のもとでは、資本家が資本を蓄積するだけで、労働者は最低賃金のままどん底の生活を続けることになっていた。古典資本主義は、たしかにそれに近かったけれども、そのあと労働者の所得も目に見えて増えていきましたから、それにつれて労働者の不満もおさまってきた。家も掘っ立て小屋よりはまし。子供に教育も受けさせられる。自分だってゴルフとかマージャンとか競馬とか、いろいろ適当に楽しめる。そういう意味で、マルクスの予想は外れてしまった。

でも、時間の面に限って言えば、やっぱり問題は片づいていません。相変わらず、一週間のリズムがあり、自分の労働時間は企業が決めて自分の自由にならない。生活のうち、一番大事な部分は、企業に押さえられちゃってるわけです。家庭と企業と学校と、こうしたエリアのあいだを右往左往しているだけで、自分の生活をどう組織したらいいかわからないという感覚、この感覚は変わっていない。これがもっと昔の、職人の時代にはあったのです、自分が時間を支配しているという感覚が。だけど賃労働、工場労働の時代になってから、

この感覚はなくなった。いくら高給取りのサラリーマンにしたって、やっぱりそうなんです。所得の点から言えば、奴隷とは言えないだろうけれども、時間の点からすれば、奴隷制の延長と言えなくもない。

3、人間の組織

ところで、人間というのは、生まれた段階でどんな人間になるのか、決まっているわけじゃあない。設計図なしです。人間は、とても柔軟なため、自分が何者なのかわからないのです。これは、いくつになっても、おそらく死ぬまでそうでしょう。

しかし、横から観察していると、人間はとてもパターン化されている。毎日おんなじ時間に起きあがって、おんなじことばっかりして、ほとんど進歩がない。そういうもうひとつの面がある。

これはどういうことかと言うと、やっぱり教育の賜物、習

慣の賜物なのです。ブラウン管にも、〝焼きつき〟という現象がありますが、本来はなんでも映るはずが、あまり同じものばかり映し出していると、それがこびりついてしまうのですね。それと同じことが、人間にもある。人間は、本来自由なんだけど、同じことばかり、決まりきったパターンを繰り返していると、自分に対するイメージ喚起力が下がってきちゃって、他人が思うとおりの人間、他人が指示するとおりの人間にすぎないのではないかと、自分でも思いこむようになる。これも、焼きつきの一種でしょう。

どうしてそんな焼きつきが起こるかというと、人間の環境があまりにコントロールされていて、ワンパターンだから。まず、子供の頃の学校。人間はもともと、予測不可能な生き物で、いろんな人間と出会うチャンスがあるはずですが、学年がおんなじ人間ばかり集めてしまう。住んでいるところもおんなじ、着ているものもおんなじ、下手をすると偏差値や親の所得もおんなじだったりして、ちょっと違うといじめられたりする。そういう環境に置かれたのでは、いくら教科書ですばらしいものを読んでもだめだ。

じゃあ、学校を出たら少しはましになるかというと、同じようなことが実は企業にも、家庭にも言える。

企業は、なんと言っても品質管理の世界で、生産性を上げるにはどうしても、人間の行動のパターンをコントロールせざるをえない。だから、焼きつきがとても起こりやすい。これを避けるのはとてもむずかしい。

じゃあ、家族はどうか。最近は核家族になって、人間関係が単純になりました。家事もマニュアル化され、家事サービスの商品化も進んでいる。お父さんは、家に寄りつかない。お母さんの役割はいろいろあるはずですが、これもパターン化されてしまっていて、そんなに自由の余地がない。いくらハッピーでバラ色で、と家庭のことを粉飾しても、とてもそんなものではないわけです。子供のほうでも、そんなことはわかっている。そうなると、ここでも焼きつきが起こる。

人間というのは、焼きつきを起こす動物である。だとしたならば、そこから自分を再発見するために、別な環境、別な条件下に自分を置きなおす必要があるのです。

そうすると、企業と家庭の往復ではいけない。企業でも家庭でもない、第三のエリアが必要になってくる。そこでは、企業や家庭といった、自分のバックグラウンドを剝ぎ落として、いろんな年代、いろんな背景を持った人びとと出会う。それができるかどうかが、生活の豊かさを再発見できるかどうかの、重大なポイントだと思う。

ではそのエリアとは、どんな場所なのか。いろいろに考えられます。外国の言い方で言うと、コミュニティ。とにかくこれは、自分の自由、選択性がいちばん高いエリアなんですね。アメリカみたいな社会をイメージしてみると、コミュニティにもいろんなレヴェルがあって、大学なんかもひとつのコミュニティです。知識の生産と再生産のためのコミュニティ。知識を享受できるための、いちばん選りすぐられたコミュニティ。もう町そのものになっているわけです、大学が。

知識に関心をもつ、多くの人びとの出会いの場所として、大学町というものがある。

あとアメリカには、いろんなボランティア団体がある。これは、自分が何をしたいかという意志から出発する、採算を度外視した人びとの集まりだ。ここには、採算や効率性の制約といったものがない。だから、自分の意にそまない人間関係を作る必要もないわけです。

ボランティアのほかに、宗教団体みたいなものもそう。芸術みたいなものもそうだし、生涯教育もそう。それから、政治です。政党の活動もそうしたものである。どういう階層の人間であるかと関係なしに、一人一票の原則にもとづいて、コンセンサス（その社会のマジョリティ）を形成するために、誰とでもディスカッションを重ね、議論を組み立てていく。そういう自由な空間を、政治は約束する。

企業でも家族でもなくて、そこに収まりきらない人間の可能性を最大限にふくらませる場所。それが第三エリアである。ここに、企業からも家族からも人間が出ていって、新しい出会いのかたちをつくる。人間関係をつくる。そういうことができるように、経済的な裏づけと時間的な裏づけを与えるというのが、いま生活を充実させるため、決定的に大事なことじゃないだろうか。

4、日本は生活大国になれるか

最後に本題の、日本は生活大国になれるのかどうか。

結論はあとで言うことにして、政府が昨今落ち目の消費社会とバブルの崩壊を見てなんと言ったかというと、いまさら労働者に所得倍増を約束してもしょうがないので、「生活」だと言った。やっぱり労働者、民衆に希望を与えないといけませんから、生活大国になりましょうね、と言ったのです。

これには、ふたつのポイントがあって、ひとつは年収の五年分で住宅が購入できる。もうひとつは、労働時間短縮で、余暇の時間が多くなる。こういうことのようです。方針としては、外れていると言えないけれど、ちょっとやっぱり違うのではないか。

まず最初の、五年分の年収で家が買えるという発想ですが、たしかに多くのサラリーマンはそれを望んでいるだろう。都会にやってきて、大学新卒で入社して、係長かなにかある程度の年齢になって、女房子供もいてという人が、五年分の年収で家が買えるのなら、三十五歳くらいでローンを組んで、子供が大きくなるころには家があってちょうどいいなという発想なのです。家があって、一人前。でもよく考えると、これは農村

の発想だ。

農村では、農村共同体があって、田畑を持っていないとだめ。自分の家があって、一人前と言われる。その共同体のメンバーになるためには、その住んでる場所に持ち家がないとだめだっていう発想だ。それを都会にそのままあてはめている。

持ち家に反対する気はないですが、どうしてそういう発想になるかというと、それは、企業が共同体の一種だと理解されてるからじゃないでしょうか。共同体であるからには、当然従業員に、持ち家が持てるくらいの給料を払わなければならない。

でもそれは、東京に持ち家が買えるくらいのスペースがあるという前提で、話が進んでいるわけです。けれど、どう考えても、こんな東京みたいなごみごみしたところに、都心から一時間やそこらの場所に庭つき一戸建てなんか無理だ。そういう時代は何十年も前に、とっくに終わっている。東京はもう別な原理で動いているのに、企業はまだ共同体みたいな観念をもっていて、従業員のほうでもどこかでそれを期待しているふしがある。持ち家がだめなら、せめて社宅をなんとかしてほしいとか、厚生施設を充実してほしいとか、そういうことを考えてしまう。でも、企業や社宅や何かの名目で、住宅を取得することを認めると、持ち家はますますサラリーマンの手の届かないものになるのです。

本当は、その共同体の考え方が、サラリーマンの働きすぎとか、年功序列とか、会社人間とか、コミットメントのしすぎを生み出してしまっていて、かえって生活を貧しくしているんです。年収の五倍で持ち家を、なんて言われるとついその気になりますが、どうもそれは、企業のよき伝統を守っていこうというにおいがする。それだと、かえって企業での人間関係の焼きつきがひどくなってしまって、自分をますます会社人間以外の可能性でとらえられなくなってしまうのではないか。

みんなが持ち家を持とうとするから、かえって東京の地価がつりあがる。発想を変えて、最初からきちんとした集合住宅を作っていれば、並みの家賃で都心に住めていたはずなんです。

むしろ企業は、共同体的な運営を、徐々にやめていったほうがいい。

たとえば、企業はいま、週五日なら週五日、従業員を会社に縛りつけて、ずっと同じ役柄をやらせているでしょう。営業畑のなんとかさんだったら、営業第何課長を週五日やってる。それを、私の提案ですけども、そういう人は週三日それをやるだけにして、残りの二日は、別の人事のセクションに行ったり、別の会社で働いたりする。要するに、いままでみたいな仕事のやり方を、週三日までにすることを原則にするのです。いまだと、能力のない人でも年功序列で部長の順番になったりして、困るでしょう。だったら、三日だけ部長で、あとは全然別なところでヒラとか、そういうふうにする。そうすると、焼きつきがほどけます。ずーっと部長だったら、

もう「身分」ですけど、木曜～金曜は別の人になっちゃえば、身分でなくて職能だっていうことがはっきりする。そうすると、共同体でなくなる感じがします。

私の職場である大学には、パートタイムの人が大勢いるので、そんなことも考えてみたのですが、テンプ・スタッフとか、ハーフ・スタッフとか、ジョブ・ローテーションのような仕組みは、組織の効率的な運用と両立すると思うのです。

もうひとつ。こんどは人間を主軸にして言いますと、やはり転職とか、キャリア・アップを考えていかなきゃいけない。大学でも、これから毎年学生が減っていくというので、あせっています。下手をすると、大学がからっぽになる。じゃあ、社会人を入れるしかない。その昔、大学に行くことを断念して就職して、その後キャリア・アップしたり転職したりする機会はないかと思っている人は山のようにいるわけで、そういう人たちを大学で受け入れられれば、どちらも助かる。

でも、いまは企業のバックアップがないので、大学に来ようと思ったら、それこそ決死の覚悟で給料も投げ出して、将来の不安も妻子も抱えて飛び込んでくるしかない。大変なハンディです。そういう垣根を、やはりなるべく小さくしないといけない。

企業から大学に行って、また企業に戻る。途中から、政府に移ってもいいし、どう動いたっていいわけですが、そういうパイプをあちこちに通じさせておかないと、こういうやり方はなりたたない。機会が開かれていて、意思と能力があれば、男女を問わず自分の道を進んでいくことができる。そうありたいものです。

こういうルートがいく通りも開けていれば、たとえ毎日の時間が企業に占められていたって、個々人のキャリア全体を通してみたときに、何をいつやるか自分で決めていることになるでしょう。同じ会社にいたら、昇進やローテーションは、やっぱり社内事情や上司との関係で決まってしまうから、自分の意思通りにはならない。それを自分の手に取り戻そうと思ったら、やっぱり企業から企業へ、動いていくしかない。

住宅の問題に、これを当てはめてみると、ライフ・ステージのどの段階で、どの場所にどれくらいの大きさの部屋に住みたいのか、この希望が生涯にわたってかなえられると保障されれば、なにも持ち家にこだわる必要は全然ない、という考え方になります。A社にいた時には、A社のそばに通勤に便利な家を借り、家族構成が変われば今度は別の場所に行き、それから郊外に行ったり、退職したら農村に住んだりすればいい。住宅も、質が高くて家賃のそれほど高くない賃貸用のものがあれば、五年の年収で持ち家が持てる、という政策をとる必要は全然ない。

持ち家どうこうという計画は、垣根で囲まれた家庭をどんどん増やし、「岸辺のアルバム」みたいな問題を抱えた家族を、郊外の新開地に量産するわけで、決して第三のエリアを拡げることにはならない。それに、ある程度都心に住んでいないと、芝居を見るにもどこに通うにも、不便で困るでしょう。生活大国とは、今みたいな企業大国ではだめなんです。

そして二番目。時短の問題です。

労働時間の短縮も、それ自体、悪いことじゃない。それは、週末が増えるってことですから。だけど問題はもはや、労働日と週末の比率の問題ではないんです。比率を越えた、時間の支配権の問題。労働日の支配権も、労働者が取り戻すべきだし、労働と余暇が渾然一体となっているのが、やはり理想だ。

こういう理想を実現しているのが、芸術家です。芸術家は、余暇のなかに労働があり、労働のなかに解放がある。苦役としての労働をしてないから、週末なんか必要ない。もちろんそれなりのプレッシャーもあるでしょうが、みんな身になるものです。

もちろん、すべての労働が芸術になるわけにはいきません。いくら、芸術化産業とか言ってもね。でも、見習えるところはある。

芸術と、工業製品の違いはどこかというと、工業製品には機能に対する期待があって、それは、みんなが同じことを期待するということなんです。歯ブラシは歯が磨ける、ラジオはひねると音が出る、……。そういうパターン化した期待に応えなければならない。いっぽう芸術はそうではなくて、その人の個性、意外性、独自性に対する期待なんです。だから、一個一個の作品がかけがえないものである。ある人が才能とか天分とかいった自分本来の可能性を失わないで、そのままほかの人に承認されてお金がもらえて生活が成り立つ、そこが工業製品と芸術品の違いです。

すべてが芸術品になることは不可能です。だけど、工業製品のなかでも、芸術の要素をどんどん増やしていくことは可能なんです。それは、第三のエリアでやればいい。

たとえば、音楽を考えてみる。もし商品化のことだけを考えれば、世界一ピアノを弾くのがうまい人のレコードを作って、それを世界中で売る、というのが合理的です。けれど、もしも生で聴くという要素を考えに入れると、世界で一番うまい人の演奏をすべての人が生で聴くわけにはいきませんから、二番目の人や、三番目の人や、……百番目の人や、町内でいちばんうまい人で我慢せざるをえない。そうすると、町内でいちばんうまい人は芸術家のはしくれになれるわけです。

第三のエリアで、人間と人間とのじかの触れあいを重視すれば、町内の思想家、町内の芸術家、町内の哲学者、町内の教育者が出てくる。まあ、町内の教育者は、塾があるから比較的それに近いかたちだけれど、とにかくそういう、人間関係に基礎を置いた活動が新しい重みと輝きを持ちはじめる。政治や教育はもともと、人間関係に基礎を置いてますから、そういうちいさな第三のエリアでの活動が大事になってくる。それ以外のものだって、そうしていけるものはなるべくそうしていったらいいんです。

そうすると、誰だって、コミュニティのなかでは自分のやりたいことをやって、しかも社会的な承認がえられる。お金を使って遊びに行く余暇じゃなくて、時間を使って本当にやりたいことをやる。それが実現してこそ、生活大国というものでしょう。

（社会学者）

編集後記

●あけましておめでとうございます。不況不景気ムードのただ中で迎える新年ですが、（しかし、実際「時代なんてパッと変わる」ですね）、こういうときだからこそなにか面白いこと新しいことしたい、そんな気分の93年の幕明けです。

さて、昨年好評の「書きぞめ」に続いて、今年は「○」をお題の31氏による画賛大会。それぞれの工夫と苦労と遊び心が感じられるお年玉ですが、これ、やろうとするとけっこうムズカシイですね。あなたなら、この○、なにに見たてますか？

山瀬まみちゃんの先月号の最終回に続く「ホントの最終回」にかわって、今月から新登場は、高橋源一郎さんの新連載小説。お読みいただいておわかりのように、文芸論壇文化時評の新しいスタイルとして楽しんでいただければ、タカハシさんは「しめしめ」とつぶやくかもしれません。

ところで、モデル宮沢りえ撮影篠山紀信の表紙は、週刊朝日から借りてきたわけではなく、ちょうど同じ頃の撮りおろしです。もちろん例の騒ぎの前に撮りおえていたものですが、私たちもやっぱりあのことはまったく知らなかった。去年のサンタフェ騒ぎのときもそうでしたが、りえちゃんに表紙に出てもらうと、きっとそのあとすぐに大騒ぎがおきる、というマヌケを、今度もまんまと繰り返してしまったというおそまつでした。でも、まだ子供っぽさの残っていた一年前に比べ、まぶしいくらいに美しかったのが印象的で、ああやっぱりそういうことだったのですね。（島森）

●待ちに待って、高橋源一郎さんの新連載を始めることができました。なお、文中の明治時代の文献からの引用に振られたルビは、編集部によるものです。（あえて旧字は新字に表記しました）（笠原）

●毎月の面白かった広告を紹介するアドトレンドのコーナーが、今月からスタイルを一新。また、春ごろから、広告のクリエイターインタビューも再開する予定です。ご期待ください。（白滝）

●昨年の書きぞめにひき続き、たくさんの素敵な画賛が届きました。私も○にかけて一つ。「今年こそご縁がありますように」（賀川）

●今月登場の方々をご紹介します。

細川護熙　日本新党代表。参議院議員二期、熊本県知事を経て、第三次行革審「豊かなくらし」部会長をつとめる。92年日本新党結成。論文「『自由社会連合』結党宣言」も話題になった。

橋爪大三郎　社会学者。東工大工学部助教授。新しい社会理論を構想しつつ、わかりやすい言葉で現代社会を解き明かす。近刊に『民主主義は最高の政治制度である』。

荒木経惟　写真家。ここ数年の写真集と写真展の数では、たぶんこの人がトップだろう。「天使祭」のあとにも「情事」が控えている。ヘア問題で略式起訴という事件も。

伊藤俊治　美術評論家。『アメリカン・イメージ』『ヌードの歴史』などの著訳書がある。シリーズ『NUDE』の編集も担当した。

坂田明　ジャズ・ミュージシャン。最近は民謡の伊藤多喜雄や和太鼓の林英哲などと共演、アイヌ詞曲舞踊団「モシリ」にも参加する。「ミジンコ倶楽部」会長。

杉浦日向子　漫画家。いま見てきたように〝江戸〟を語る平成の町娘。『風流江戸雀』『百物語』など。「夜中の学校」シリーズの『ぶらり江戸学』も好評発売中。

植島啓司　宗教学者。関西大文学部教授。著訳書に『分裂病者のダンスパーティ』『メディア・セックス』など。いつも行方不明だ!?

岡崎京子　漫画家。『Pink』『危険な二人』など、Hで乾いてて切ないその世界にファンは多い。『東京ガールズブラボー』下』も出た。

高橋源一郎　作家であると同時に、『文学じゃないかもしれない症候群』など文芸批評に新しい風を吹き込む。競馬評論家としてもよく当たる（？）と評判だ。

山瀬まみ　タレント。バラエティ、CMなどに大忙し。「お父さんのためのワイドショー講座」でキャスターにも挑戦中。

淀川長治　映画評論家。こじらせた風邪も無事なおり、変わらず旺盛に映画を見、原稿を書く日々。

杉浦孝昭　映画評論家。今日は札幌、明日は沖縄、飛んで返って試写会と、目の回るような日々。

草森紳一　評論家。原稿を書く前の資料への取り組み方が尋常じゃない。資料の多さも尋常じゃない。近刊『散歩で三歩』が好評。

宮崎健二　朝日新聞名古屋学芸部勤務。もとはといえば、「CM天気図」の担当で、感想を膨大なFAXで送ってきたのが始まり。

編集長＝島森路子　スタッフ＝笠原ちあき・白滝明央・賀川優香・三原千佳／立木さとみ・高橋伸子・泉ひろえ・藤井明人
発行人＝天野祐吉　発行所＝マドラ出版株式会社　〒150 東京都渋谷区広尾3丁目15番地28 電話（東京03）3406-1445
FAX（東京03）3406-1529 振替口座（東京）5-40500 本文印刷・製本＝杜陵印刷株式会社 表紙印刷＝株式会社新光美術